

主 題：主に似た者としてよみがえる

聖書箇所：コリント人への手紙第一 15章29-49節

先日礼拝メッセージを聞かれた海外在住の方から電話をいただきました。その方は主からいただいた復活の約束を何度も感謝し、またそのすばらしさを感慨深く話してくださいました。確かに私たちキリスト者にとって復活というのはすばらしい約束であり、希望です。この希望が私たちキリスト者をますます奮い立たせ、主に服従して前進する歩みの動機となります。しかし、主に逆らい続け、主の救いを拒絶している人たちにとっては、復活というのは最も恐ろしい出来事です。父なる神様のさばきがそこにあるからです。同時にサタンも悪霊たちもすべてさばかれて永遠の地獄へと送られ、最後の敵である死が完全に滅ぼされる。死が滅んでしまうからもう死を恐れることはない。すばらしい主の約束がみことばの中に記されていました。

きょう私たちが見ようとしている I コリント 15 : 29からは、コリント教会がパウロに復活についての質問をしていたことを見ることができます。よみがえるというのはわかる、では私たちクリスチャンがどのような姿でよみがえってくるのか、それが彼らの質問でした。主の復活という約束を何度も何度も語っていながらも、その約束を信じ切っていない人たちが教会にいることをよく知っていたパウロは、継続して彼らを正そうとするのです。この29節からそのことを見ることができます。

29節は「もしこうでなかったら」という接続詞で始まっています。日本語では非常に長いのですが、ひとつの接続詞だけです。「もしそうでなければ」と訳せる接続詞が使われています。つまりこれまで教えてきたすべての人の復活と、悪に対する主の完全な勝利をもって主はご自身の計画を完結なさるのだというメッセージを、この真理を疑っている人たちに対して、パウロはこの後二つの矛盾点を挙げていきます。その矛盾点を挙げることによって、彼らが自分自身の間違いに気づくようにとパウロは導いていこうとするのです。もしこれらが事実でないと言うのだったら、もし私の話してきたメッセージが真実でないと言うのだったら、なぜあなたたちは次のようなことをしているのかと、彼ら自身が行っていた慣習を取り上げて、彼らの矛盾を指摘するのです。

#### A. 復活を信じない者の二つの矛盾点 29-32節

##### 1. 死者のためのバプテスマ 29節

29節「もしこうでなかったら、死者のゆえにバプテスマを受ける人たちは、何のためにそうするのですか。」と、非常に難しい聖書の箇所がここに記されています。「死者のゆえにバプテスマを受ける」とのは、幾つかの説が存在するのですが、恐らくこれは死者の身代わりにバプテスマを受けるという、当時存在していた慣習を話しているのだと思います。というのは初代教会において、代理バプテスマということが実際に行われていたようです。どういうことかということ、教会員になることを目指して学びを受けていた人が、実際にバプテスマを受けることなく亡くなった場合、彼に代わってほかの人がバプテスマを受けるというようなことがなされたのです。もちろんこれは聖書的に見たら、全く間違っているということがおわかりですよ？でも確かにそのようなことがなされていたのです。今お読みしたのは、バークレー先生が記したものです。彼は続けて「この慣習はバプテスマについての迷信的見解から生じた」と書いています。それはバプテスマを受けなければ人は天国の祝福から必然的に除外されるという考えだったと。その除外から死者を守るために、死者のかわりにバプテスマを受けることを申し出た人々が実際に存在したとバークレー師は言うのです。

先ほどもお話ししたように、これが聖書的でないということは皆さんおわかりだと思います。バプテスマを受けることによって、またどんな行為によっても、私たちは罪の赦しをいただくことはありません。イエス・キリストを信じる信仰によってのみ、私たちはこの救いにあずかるのです。このテキストを見ると、パウロは彼らの間違いに時間を割いて矯正しようとしていません。あえて彼らがしている慣習を引き合いに出して、彼らの間違いに彼ら自身が気づくようにと導いています。パウロは、もし復活がないとするならば、なぜあなたたちはそんなことをしているのかと言っているのです。なぜならこの人たちがしていることは、バプテスマを受ける準備をしていたのに受けることなく死んでしまった人が、この状態だったら天国に行けないかもしれないから代わってバプテスマを受けると。その背景には死んだ後天国に行くのだ、死んだ後も私たちは生き続けるのだという考えが存在するのです。死んで終わるのだったら、なぜバプテスマを受ける必要があるのかと。パウロは彼らがしている慣習を引き合いに出して、あなたたちは復活を信じないと言っているけれども、していることはそれと矛盾しませんかと言ったのです。29節を最後まで読むと、「もし、死者は決してよみがえらないのなら、なぜその人たちは、死者のゆえにバプテスマを受けるのですか。」、今お話ししたことです。

## 2. 信仰ゆえの迫害 30-32節 ローマ8:36、Ⅱコリント11:23

その後30-32節は、恐らくコリント教会の多くのクリスチャンたちも経験していた迫害の話です。パウロたち、特に初代教会にあって、多くのキリストの弟子たちが大変な迫害に出会いました。30-31a節「また、なぜ私たちもいつも危険にさらされているのでしょうか。兄弟たち。私にとって、毎日が死の連続です。」とパウロは証ししています。まず30節に「いつも」ということばがあります。そして、その後に出てくる「危険」という動詞も現在形です。つまりこういった危険がいつも自分たちの周りに存在していた、その状態をこうしてパウロは証ししているのです。皆さんも覚えておられると思いますが、どうしてこの使徒たちが、信仰者たちが継続していつも危険な目にさらされていたのか、いつも迫害を受けていたのかと言うと、それは彼らのメッセージに問題があったのです。

彼らは十字架に架けられて死なれたイエスが、死から敢然とよみがえられた神である、救い主だというメッセージを語ったのです。この福音が問題だったのです。その福音を信じない人たちからすれば、これは誤った教えであると言って彼らを迫害するのです。確かに使徒たちもそうでしたし、パウロ自身を見てもさまざまな迫害を経験し、死に直面したこともたびたびありました。Ⅱコリント11章の中で、パウロはこんなことを言っています。「牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。」と。パウロたちが経験したことが事実であったということをあえて強調するために、31節を見ると、「これは、私たちの主キリスト・イエスにあってあなたがたを誇る私の誇りにかけて、誓って言えることです。」と記されています。パウロはこれが事実だ、私は「誓って」そのことを言うのだと、自分たちが実際に経験していたことを彼らにいま一度教えます。使徒14章でルステラという町を訪問した時に、パウロは石打ちを経験しています。人々は彼が「死んだものと思っただけ」と。パウロたちはまさにこういう生活を日々送っていたということを我々も知ることができます。

迫害の話がされていますが、パウロはコリント教会に対しておもしろことを語っています。31節後半に「あなたがたを誇る私の誇りにかけて」と書かれています。この表現からパウロがコリント教会の人たちをどんなふうにも思っていたのかを知ることができます。霊的に大変幼い彼らでしたけれども、確かにパウロは彼らのことを愛し、彼らのことを誇りに思っていたのです。そんな思いを持ってこの手紙を記しているのです。

さて、もう一度パウロのメッセージに戻って迫害のことを一緒に見ていきましょう。32節に「もし、私が人間的な動機から、エペソで獣と戦ったのなら、何の益があるでしょう。」とあります。パウロはエペソでの出来事をあえてここで記しています。Ⅱコリント1章にエペソ、アジアで受けたさまざまな困難のことをパウロは記してくれています。Ⅱコリント1:8-9aに「兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。」と記されています。アジアというのは現在のトルコでエペソという町はここに存在しました。ですから恐らくエペソにおいてパウロ自身が経験した大変な危険をここに記しているのだと思います。少し気になるのは、32節に「エペソで獣と戦った」と書いてありました。これは例えばコロシウムなどの競技場で獣と戦うことです。ローマのコロシウムで生きたまま野獣と戦うということがあったのです。そういうことばがここで使われています。でも、パウロが「獣と戦う」というようなことがあったかと言うと、それはなかったはずで、なぜかと言うと、パウロはローマ市民だからです。ではなぜパウロがこのようなことを記したのかと言うと、それは恐らく彼自身が人々から受ける迫害がまさに野獣がいのちをねらって飛びかかって来るさまに似ていたのでこういう表現を使ったのでしょう。まさに野獣が襲って来るかのように、人々は彼に反発を覚えて襲いかかってきたと。彼は大変な経験を繰り返し味わったのです。

32節でこのエペソでの迫害の話をするのですが、「もし、私が人間的な動機から、エペソで獣と戦ったのなら、何の益があるでしょう。」とあります。つまり、エペソ、アジアで彼は信仰ゆえにいろいろな迫害を経験したのです。パウロは、もし私が「人間的な動機」でこのようなことを自分の身に招いたとしたら、一体何の益があるかと言うのです。この「人間的な動機」ということばは、「何かに従う」という前置詞と「人間」という名詞からできていることばです。ですから、「人間に従って」と訳せるようなことばです。つまりもし私が教えてきたこと、私が信じるのがすべて人間の考えであって、真実でないとするならば、私が受けているこのさまざまな迫害、こんな人生の一体どこに益があるのかと。真実ではなく偽りに従って行動しているとするならば、その人生はむだな人生ではないかとパウロは言います。もし復活が真実でないならば、パウロは大変愚かな空しい人生を過ごしたことになります。なぜなら彼は嘘のために迫害を受け、嘘のためにいのちを落としていくからです。だからあえてパウロは32節で「もし」と言っています。「もし」私が嘘を信じて、そのためにこんな迫害を受けているとしたら、私の人生にどんな益があるのかと。

そして「もし、死者の復活がないのなら、『あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか。』というこ

とになるのです。」と続きます。もし死んでそれで終わってしまうのだったら、この人生を好きに楽しく生きていいのではないかと。そんな考えはずっと人々の間にあります。死んだら終わるのだから、生きているうちが花なんだから、今生きている間に楽しいことをすればいい。もし人が死んで終わるのだったら、よみがえりがないのなら、復活がないのならそうやって生きるべきだと。でもパウロは復活はあると言うのです。なぜなら、復活というのは彼自身が編み出したものではない。人間の考え出したものではない。パウロは実際にイエス・キリストの復活を目撃した、私はその証人なのだと言います。この確信がパウロの歩みの動機だったのです。「人間的な動機」ではなかった。イエス様が本当によみがえって、自分の前にその姿を現された。この揺るがない確信が彼自身の信仰者としての歩みの動機だったのです。つまり私は死んでもよみがえるのだ、だから今生きている間はこの主のみこころに従って忠実に生きていこう、そうやって彼は歩み続けたのです。そしていろいろな迫害を経験し、殉教していったのです。でもその人生はむだではない。なぜならイエス様が死からよみがえって来られ、今も生きておられる。そして私たちも同じように死んでも生きるのだという希望を持っていたからです。

ちょうど先週1月8日はある5人の宣教師たちが殉教したことを記念する日です。65年前、1956年1月8日、南米エクアドルのジャングルの中でまだ福音を聞いたことのないインディアンたちに対して5人の若い宣教師たちがアメリカから出て行きます。そして彼らはイエス・キリストの福音を伝えることだけを願って、彼らとコンタクトを持ち、そして彼らとやっと会って福音を語る、その日に、みんなではないですが、彼らは殉教しました。ではこの殉教した人たちはむだな人生を生きただけかと言うと、そうではないですよ。彼らを推し進めたものはパウロと同じです。我々は死んでもイエス様とともに永遠を生きる。だから彼らは主の導きに従って生きたのです。たとえその結果、いのちを落とすことになったとしても。

2018年、インドでヒンズー教徒だった27歳の青年がイエス・キリストを信じます。彼はイエス様を信じた後、三人の兄弟を救いへと導きます。約2年後の2020年、去年の話です。彼が住む地域のヒンズー教徒たちが彼の家を襲います。そして二度目に彼の家を襲った時、彼は連れ去られ、翌日彼の遺体は道端で発見されました。二回目にヒンズー教徒たちに襲われることを察知した時に、彼は妻に自分は殺されるかもしれないと言います。ヒンズー教徒たちが望んだことは、イエス様に対する信仰を捨ててもとのヒンズー教に戻るようにと強制することでした。でも私はそうはしない。私のイエス・キリストに対する信仰を捨てることはない。あとに残されたのは妻と二人の子どもたちだけでした。彼の妻はこのような悲しみを通して来たのですが、何があったとしても私もこのイエス・キリストに対する信仰を捨てないと言いました。

こういった多くの殉教者たち、彼らは人生をむだにしたのでしょうか？私たちは死んでも生き返るのだと、復活を信じた彼らは空しい人生を生きただけになるのでしょうか？パウロが私たちに言うのは、とんでもない、確実にすべての人はよみがえるのだ、そして感謝なことに私たちはよみがえって主イエス・キリストとともに永遠を過ごすのだ、主はこんな私たちに報いを下さると。このように復活というのは信仰者にとって大きな力となりました。そしてたとえこの地上でのいのちが終わる、そんな運命を迎えたとしても、この復活を信じた者たちのうちに働いてくださっている、生きておられるキリストのみわざを通して、今も多くの人がこの主のみこころに従うのだと。ですからパウロはこの復活の大切さを人々に教え続けるのです。

### 3. 警告 33-34節

教え続けていながらこの復活を信じない人々がいる、その現実に対してパウロは33-34節で警告を発しています。「思い違いをしてはいけません。友だちが悪ければ、良い習慣がそこなわれます。」、「思い違いをしてはいけません」ということばは「真理から導き出す」とか、「惑わす」、「欺く」、「だます」という意味です。パウロは真理から迷い出てはいけない、偽りによってだまされてはいけないと言います。残念ながら惑わす人々、人々を真理から偽りへと導いていくような人々が存在するからです。ですからパウロは「友だちが悪ければ、良い習慣がそこなわれます」と言ったのです。この「そこなわれます」というのは「不純にする」とか「墮落させる」ということです。パウロはコリント教会にこの問題があることを知っていたゆえに、Ⅱコリント11:3で「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています。」と言っています。ここでは「失う」と訳されています。つまり彼らが持っていた純粋な信仰が汚されてしまう。そういう働きをする人々がいるのだと言うのです。サタンはそういう人々を使って、そういう惑わしをもたらすのです。ですからパウロは「友だちが悪ければ、良い習慣がそこなわれ」る、気をつけなければいけないという話をするのです。

私たちがそういうことわざを知っていますよね？「朱に交われれば赤くなる」、悪い人と関われば悪くなるし、良い人と関われば良くなる。またこういうのもあります。「善悪は友を見よ」と。

その人を本当に知りたければ、その人の友人を見たらいいと。友人から受ける影響があるからです。我々信仰者も同じことが言えます。みことばを愛して主の教えに服従したいと願いながら生きている人が友人であるならば、両者はお互いに励まし合いながら、主に喜ばれる者へと成長していくでしょう。しかし、主よりもこの世を愛し、みことばよりも自分の考えを優先する人が友ならば、間違いなく両者は主への忠誠を失う者となっていくでしょう。なぜなら世を愛しているならばそういう方向へと間違いなく導かれていく可能性があります。そしてパウロは34節「目をさまして、正しい生活を送り、罪をやめなさい。」と言います。「目をさまして」、このことばは酔いからさめなさいということです。そして「正しい生活を送り、罪をやめなさい」、「罪をやめ」て、神がお喜びになる「正しい生活」をするようにと。

この警告を発した後、パウロは「神についての正しい知識を持っていない人たちがいます。」と続けます。こういう人々が存在することをパウロは知っていたのです。どういう人かというと、神について何も理解していない人、辞書は「故意に知ろうとしない」とも定義します。みことばが語られていても、聞いていないのです。なぜなら神の真理を知ろうとしないからです。ただそこに座っているだけかもしれない。ですから、どんなに時間はたっても神についての知識を持っていない。神について何も理解していない。残念ながらこういう人々が教会に存在し、人々を惑わしていたのです。ですからパウロは「私はあなたがたをはずかしめるために、こう言っているのです。」と34節に続けます。つまりパウロは、こういう人々に惑わされてしまった信仰者たちを矯正したいと思ったのです。そこで「目をさまし」なさい、私はあなた方を辱めてでも、つまり自分たちの間違いに気づいて間違っていたことを恥じるような、そういう経験をさせてでも真理に立ち返ってもらいたいのだと、それがパウロの願いでした。その過ちの中をずっと歩み続けるのではなく、間違いに気づいて間違っていたことを恥じて、悔い改めて神の前に立ち返ってくることを望んでパウロはこのようなメッセージを送ったのです。

**適用：**

・「偽りの教えに惑わされない者となる」こと エペソ4：13、14

さて、パウロが教えてくれたこのレッスンから我々はどんなことを学ぶことができるかと言うと、一つ目は、あなた自身が偽りの教えに惑わされない者となることです。いろいろな間違った教えの中でも、その間違いをきちんと判断して何が真理なのかをしっかりと見分けることができるようになることです。そのためには成長することです。信仰において成長するならば、あなた自身がそういったことを実践することができます。「人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがない、エペソ4：14でパウロが言ったように、いろいろな惑わしに惑わされない信仰者になるために信仰において成長することです。ですからまず私たちひとりひとりの責任として、偽りの教えに惑わされない者となることです。

・「信仰の成長を助ける者となる」こと Iテサロニケ5：11

二つ目に言えることは、互いに信仰の成長を助け合う者になるということです。テサロニケの教会についてIテサロニケ5：11でパウロは「ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」と言っています。こういう生活を今から始めてくださいと言っているのではないのです。「今しているとおり」とあります。テサロニケの教会のクリスチャンたちはまさに教会の中でみんなしっかりみことばに従っていこうと励まし合っていたのです。そして信仰者が互いに霊的に成長するように高め合っていたのです。私たちが覚えなければいけないことは自分も成長しなければいけないけれども、同時に私たちの周りの人の成長を助けていくということです。

・「自分の語ることに注意する」こと

三つ目に言えることは、私たちは自分の語ることに注意することです。信仰者ひとりひとり、あなた自身が友人に語る時は、そこに存在している重たい責任をしっかりと覚えておくことが必要です。というのは私たちが語るのには聖書の教えに一致したものでなければいけない。私たちはこの世の知恵を語るのでもないし、またあなたの個人的な考えでもありません。私たちは神様のみことばに基づいて語るのです。ですから、語ることばが軽率であってはならないのです。

こんなふうにお考えになると、恐らく皆さんにとって助けになると思います。それはあなたがお話しになる時に、あなたの会話を聞いておられる主がお喜びになっておられるかどうかです。イエス様は常にあなたとともにおられるのでしょうか？だからあなたが語っていることも、考えていることも、思っていることもイエス様は全部ご存じなのですが、あなたが誰かに話している内容を全部主がお聞きになっておられる。主がそれを聞いて喜んでおられるかどうか、そのことをお考えになりながらお話しをなさることです。ただどう答えていいかわからないという案件が生じることもあるでしょう。その時は霊的リーダーのところに連れて来ればいいのです。間違いなく彼らは聖書に基づいたアドバイスをします。あなたは一緒にいてそれを聞くことによって、あなた自身にとっても大切な学びを受けることに

なる。

## B. よみがえりに関する回答 35-49節

さて、こうしてパウロはコリントの人々に対して警告を与えました。最初にもお話ししたように、コリント教会から出てきた質問に対するパウロの回答が35節から記されています。

### 1. よみがえりのからだ 35-44節

35節に「ところが、ある人はこう言うでしょう。『死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。』」、これが彼らの質問でした。この質問に対してパウロは大変興味深い応答の仕方をしています。36節「愚かな人だ」ということばが記されています。36節はギリシャ語もこのことばで始まっています。これは「理性のない」とか「無分別な人」という意味です。つまり正しく物事を考えて判断できない人です。なぜかという、この人たちはずっとメッセージを聞いてきたからです。パウロが1年半コリントに滞在した時に、間違いなく彼らに教えたはずなのです。何度聞いても正しく判断しないから、恐らくパウロはこういう表現を使ったのでしょう。もちろんその根底には彼らに対する深い深い愛が存在していたのです。

そこでパウロは彼らがよく知っている話を例えに用いてこの真理を伝えようとするのです。それは種まきの話です。「愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。」とあります。種を蒔いた時にその種がどんなふうに分芽して、どんなふうに分成長していくのか、その過程を思い出してください。蒔かれた種というのは時間とともにその外見が変化していきます。かつての形状をとどめないで腐敗していきます。しかし、その種が死んだのではありません。死んだら絶対分芽しません。ですから外見は変わるけれども、生きているからそこから芽が出てくるのです。そしてそれが分成長し、花を咲かせ、実を实らせていくのです。その実を实らせている姿、その分成長していく過程を見た時に、それは蒔いた種の姿と同じではありません。パウロの言いたいのはそういうことなのです。まさに我々の復活も同じです。我々の外側の部分であるからだは死んで滅びます。しかし、全く新しいものへと変えられていくのだと。ちょうど死んだかのように見えた種がそこから新しいものに変えられていくように。

37節に「あなたが蒔く物は、後にできるからだではなく、麦やそのほかの穀物の種粒です。」と書いてあります。パウロが言いたいのは蒔くものと後に芽生えてくるものとは全く似ついていないでしょう？最初から芽生えるものを植えたのではないのです。最初から分成長して熟した実り豊かな穂を植えたわけではない。蒔いたのは「穀物の種粒」だった。そしてその小さな種粒が似ついていないものへと、全く新しいものへと変えられた。そして38節に「しかし神は、みこころに従って、それにからだを与え、おのの種にそれぞれのからだをお与えになります。」、つまりパウロが言っているのは、そのように分成長するのは一体誰のみわざなのかということです。この変化は穀物の意思によってなされたのではなく、すべてのことは主ご自身のお考えに基づいてなされたみわざなのだ。これは主のわざ、神のみわざなのだ。パウロは言うのです。

### 1) 地上の被造物を比較 39節

また、からだを与えられたのは穀物だけではない。この後、神によって造られたさまざまなもののリストが挙がっています。パウロが言いたいことは同じことです。みんないろいろと異なるけれども、それをお造りになったのは創造主なるお方なのだということです。39節「すべての肉が同じではなく、人間の肉もあり、獣の肉もあり、鳥の肉もあり、魚の肉もあります。」、地上の被造物を比較しているのです。人間も獣も鳥も魚も、みんな異なる肉を持っているのです。それぞれ異なるからだを持っているのです。でもそのすべては主によって造られたのだという話です。

### 2) 天と地のからだを比較 40節

40節には「天上のからだもあり、地上のからだもあり、天上のからだの栄光と地上のからだの栄光とは異なっており、」と書いてあります。天体の話は41節に出てきますから、これは天体の話ではないのです。では何の話をしているかというと、まず「天上のからだ」と「地上のからだ」が存在し、それぞれ違うと言うのです。そして「天上のからだ」の栄光と「地上のからだ」の栄光とは異なっていると。つまり天に入るにふさわしい栄光のからだはこの地にふさわしい地上のからだとを対比しているのです。私たちは今、この血肉のからだ、「地上のからだ」を持っています。私たちはこのからだを持って天国に入れません。なぜかという、罪があるからこのからだは天国にふさわしくないからです。この地上においてはこのからだでOKなのです。でも天においてはふさわしくないのです。ですから地上におけるからだと天におけるからだに違いがあるという話です。

### 3) 天体の比較 41節

また、41節を見ると今度は天体の比較をします。「太陽の栄光もあり、月の栄光もあり、星の栄光もあります。個々の星によって栄光が違います。」と。「栄光」ということばが何回も繰り返されていますが、これは「輝き」と訳せることばです。ですから2017年版の訳を見ると「輝き」と訳しています。つ

まり個々の星は大きさや特徴が異なり、また個々の星によつての輝きにも違いがある。でもそれらすべては主なる神がみこころのままに創造されたものなのだとパウロは言うのです。

これらを話した上で、パウロは死者の復活について話を続けていきます。42節に「死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、」とあります。「朽ちるもの」というのは滅んでいくものです。「朽ちないもの」というのはその反対です。ですから確かに滅ぶ存在である私たちが滅びない存在へと変えられると。言い方を変えれば、死ぬ者が死なない者へと変えられると言えます。43節「卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらされ、」、この「卑しいもの」ということばはちょうど死体を見る時に、死体が不快感をもたらす、そういう意味を持ったことばです。ですから全く見とれるようなものが何もない卑しい存在が「栄光あるもの」に変えられる。死体のような見とれるところが全くないような私たちが神様が「栄光あるもの」にされると。このことばは「栄華」とか「莊栄」、つまり大きくて立派で美しいさま、そういうものに変えられるということです。

今私たちの持っているこのからだは「卑しい」と言われた。よく考えてみたら、自分たちがしていること、考えていること、本当に情けないことの塊ではないですか？神が喜んでいただくことをしたいと思っけていても、していること、考えていることはそれと真逆のことをしている。でも神はそんなあなたや私を「栄光あるもの」、美しいものに変えていってください。パウロは我々にそのことを続けて教えるようします。私たちは「卑しいもので蒔かれ、栄光あるものに」変わっていくと。この背後に全部あるのは、種を蒔いた時にその種から成長して実がなっていく、その話をしているのです。全く新しいものに変えられていくような。「弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらされ、」と書いてあります。私たちのこの肉体は大変弱いものでしょう？死に対して無力だし、老化に対してもどうすることもできない。すぐにけがをしてしまうし、すぐにからだを傷めてしまう。本当に弱い私たちです。でも神は「強いものによみがえ」と約束してくださった。私たちが栄光のからだをいただいた時に、もう病気で悩むことはないのです。けがをする心配もないのです。死ぬこともないのです。こんな弱いからだからそんな強いからだへと変えられるのだと言うのです。

#### **結論** 44節

パウロはそれを語った上で、44節で私たちに結論を教えるのです。「血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。」と。つまり物質的なからだと霊的なからだが存在するという話です。物質的なこの「血肉のからだ」は地上の生活に限定されたものです。先ほどもお話ししたように、死を迎えた後、誰ひとりとしてこの「血肉のからだ」を持って生きる人はいないのです。この地上で我々が死を迎えたら、私たちはこの「血肉のからだ」と永久におさらばするのです。そして私たちは後に約束されている栄光のからだを待つのです。ですからパウロはこの「血肉のからだ」で蒔かれるけれども、私たちは「御霊に属するからだ」、つまり天にふさわしいからだをいただくのだと。そのからは神の前に立つにふさわしいからだなのです。だから私たちはいつも神の栄光を仰ぎ見ることができると。すごい約束だと思いませんか？パウロはこうして何度も繰り返し我々にどんな約束が与えられているのか、この私たちに約束された栄光のからだはどんなにすばらしいものなのかを教えてください。今の我々のからは全く相反するもので、全く価値のないものから、こんなにすばらしいものに変えられるのだ、彼はそのことを繰り返すのです。

イエス様がこの新しいからだについてお話しになっておられます。ルカ20：34をお開きください。復活を否定しているサドカイ人たちがイエス様を試そうとこんな質問をします。長男が妻をめぐって子どもがなくて死んだ、次男も三男もその女をめぐって、7人も同じようにして子どもを残さずに死にました。その女も死んだけれども、「復活の際、その女はだれの妻になるでしょうか。」という質問をした時にイエス様はこう言われました。34-36節「イエスは彼らに言われた。『この世の子らは、めとったり、とついたりするが、次の世にはいるのにふさわしく、死人の中から復活するのにふさわしい、と認められる人たちは、めとることも、とつぐこともありません。』、つまり私たちが栄光のからだをもらったら、今の生活とは異なると。結婚することがなくなるということです。36節「彼らはもう死ぬことができないからです。彼らは御使いのようであり、また、復活の子として神の子どもだからです。」と続きます。まさに罪から完全に解放された「御使い」のような存在だとイエス様はお話しになりました。こういうみことばを見た時に、私たちが栄光のからだをいただいて天に行った時何をすると、少なくとも今の生活とは違うのです。今、実際していることを永遠に完璧に行い続けるのです。それはこの神を心から礼拝すること、私たちはそれを永遠に行い続けていくのです。

#### **2. 二人のアダム 45-49節**

さて、そのことを語った上で、最後45節からパウロはこのことをまだ継続して話していきます。二人のアダムを使いながらこのメッセージをします。45節「聖書に『最初の人アダムは生きた者となった。』と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。」、二人のアダムの話です。

・「最初の人アダムは生きた者」となった。 45節 創世記2：7

創造のところを思い出すと、人類最初の人アダムでした。神が地のちりから彼を造られました。そして息を吹き込むことによって彼は「生きもの」になった。創世記2：7にそのことが記されています。「その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」と。ですからここで言うように、神によってその土地のちりで造られた人間に息を吹き込むことによって、「最初の人アダムは生きた者となった」と。

・「最後のアダム」である主イエスは、「生かす御霊」となった 45節

ところが最後のアダム、つまりイエス様の話ですが、「最後のアダムは、生かす御霊となりました」とあります。この「生かす」というのは「いのちを与える」という意味です。つまりイエス様は彼を信じるすべての人に永遠の滅び、さばきからの救いだけではなくて、永遠の命を与えることがおできになる方です。その永遠のいのちを私たちはいただいたのです。主は「御霊のからだ」も私たちに与えてくださった。

そして46節に「最初にあったのは血肉のものであり、御霊のものではありません。御霊のものはあとに来るのです。」と。種まきの話を思い出してください。最初に蒔かれたのは一粒の種でしょう？それが成長するという話です。ここを見ても「最初にあったのは血肉のものであり、御霊のものではない」と。「御霊のものはあとに来る」と。つまり私たちも生まれた時はみんな「血肉のからだ」を持っているし、今も持っているのです。私たちは誰ひとりとして永遠のからだを持って生まれてきたのではないのです。その「御霊のもの」は後に与えられるのだと。この栄光のからだは救いにあずかることによって私たちは得たのです。同じメッセージをパウロはずっと語っているのです。そして47節に「第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。」と続きます。「第一の人」、つまりアダムは土から出た、つまり土から造られたということです。「第二の人」であるイエスは「天から出た者」、天から来られたお方だと言うのです。

・「土で造られた者はみな、この土で造られた者に似ている」 48節

そして48節に「土で造られた者はみな、この土で造られた者に似ており、天からの者はみな、この天から出た者に似ているのです。」とあります。「土で造られた者はみな」、すなわち全人類の話です。人類はこの「土で造られた者」に似ていると言うのです。それはからだの成分だけではなくて、同じ性質を持って我々は生まれてきているということです。どこの国に行っても人間の本質的な部分は変わっていません。みんな罪を持って生まれてきているのです。全く変わっていないと

・「天からの者はみな、この天から出た者に似ている」 48節

では「天からの者」、つまり救いにあずかり生まれ変わった者たちは、「この天から出た者」、つまりイエス様に似ている、イエス様に似た者に変えられるという話です。そのことをパウロは48節で語ったのです。

同じ真理を49節でも語っています。「私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。」と。この「かたち」ということばは、「イメージ」とか「姿」ということです。ですから土から造られた私たち人間は土で造られたもののイメージ、つまりアダムの姿を持っていた。だからアダムと同様に罪を犯し、生まれながら死ぬ存在であったと。しかし、後には「天上のかたちをも持つ」ようになる、つまり天上者としてのイエス様のイメージ、その似姿を身につける、イエス様に似た者となるという話です。ヨハネがIヨハネ3：2で「キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」と言ったようにです。これはイエス様に、神になるという話ではないのです。我々造られた被造物は絶対創造主なる神になることはありません。罪から完全に離れてきよい正しい主に似た姿に私たちは変えられるという話です。パウロもピリピ3：21で「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」という話です。

だから私たちがよみがえる時どうなるのか——。主に似た者として私たちはよみがえり、永遠を過ごすのです。これが彼らの質問に対してパウロが与えた答えです。愚か者と言ったのがわかるでしょう？なぜならこんな話は何回も聞いているはずなのです。これは我々の希望です。願わくば皆さんがこの神が教えてくださる真理をご自分の心に刻んでくださり、私はこんな人に変えられるのだ、そのことを待望しながらきょうを生きてくださることです。

さて、きょうも我々が見てきたこの復活という真理はすばらしいものです。私たちにはその約束があるのです。ちゃんとその約束が待っているのです。私は本当に死んでもよみがえり、イエス様とともに永遠を生きるのだと。そして私には主に似た栄光のからだに約束されているのだと。最後に皆さんに聞いておきたいことは、その約束をいただいたあなたはそのことを感謝しておられるかどうか——。またその約束をいただいたあなたは、だから私はもっと主に對して忠実でありたいという願いを強めておら

れるかどうか——。どういふことかという、地上での生活がどれだけ残されているかわからないでしょう？だとしたら、きょうという一日をむだにはいけないのです。明日がないかもしれないから。だからイエス様にお会いする、私はよみがえる、栄光のからだをいただくのだ、その約束を覚えている人はきょうこの日をイエス様にお会いしていいように備えておこうと。イエス様が戻って来られるとか、イエス様にお会いするという話を聞いたら、自分の愛する家族が救われていないからもう少し時間が欲しいとよく聞きます。もちろんそういう思いがあるかもしれない。でもひょっとしたら私たちはもう少しこの地上で自分のやりたいことをしたいから、もう少し時間をください、もう少し楽しませてくださいと。もしそうだとしたら、それはイエス様にお会いする備えができていないことになりませんか？神はこの約束を私たちに与えてくださった。だから私たちがこのような復活のメッセージを聞く時に、問われているのは、ではその約束をいただいた者としてあなたはきょうをどんなふう生きるのかです。主にお会いするその備えをもって、この日を生きてください。それがこの約束をいただいた者にふさわしい歩みです。感謝を持って……。